

「いいから、言えよ」

言ってみろと促したせつな、長身の影が音もなく覆い被さってきた。漠然と想像していた以上に熱い吐息が烈の頬に触れ、そつと唇に重なって離れていく。

反射的に、烈は生々しい感触が残った自分の唇を押さえていた。キスをキスとして理解する前に、驚きで頭の中が真っ白になる。

「申し訳ありません。あなたを……混乱させるつもりはなかったんです」

正宗の静かな声音で、いくらか正気を取り戻した。大学生にもなって、こんな子供だましの接触で、いちいち動揺している自分も情けない。

「いいよ。訊きたがったのは俺だ。……いきなり、実力行使に出るとは思わなかったが」
「それはっ……」

珍しくうろたえる正宗に、思わず噴き出した。こういう男だということは、烈が一番よく知っていたはずだ。

実力行使と言ったって、暴力で組み敷かれたわけじゃない。触れるだけのキスひとつするにも、正宗にはよほどの覚悟が必要だっただろう。

「わかってるよ。おまえが、そういうことに、とことん口が重いのは……。何年、いっしょにいると思ってんだ」

理解しているつもりだとなだめる烈に、正宗はやはり口を閉ざした。お互いに気まずいこと

に変わりはないが、より追いつめられているのは正宗のほうだろう。

烈から突き放すことは簡単だった。でも、距離をおいたぐらいではなんの解決にもならないことは、この四年間で、思い知らされた。

「氣にするな。嫌だったわけじゃねー。おまえの気持ちも、キスも……。まあ、混乱してるのは確かだけど……」

いつの頃からか、正宗が自分を見つめる目が、ほかの誰とも違うことに気づき始めた。一側において、彼の忠誠を当然のように受け止めてきたから、その意味を正しく読み取るのには、時間がかかりすぎたのかもしれない。

多分、正宗は自分を愛している。家族の情愛や、男女の恋情といった、どんな絆きずなよりも深く激しく。そして、烈にも同じ感情を求めている。

恋愛とかセックスとか、そうした生々しい欲望を知るには、あの頃の自分は子供すぎて、正宗の一途さを、どこかで恐れていた。

この男には、自分を傷つけることなど絶対にできない。しかし、その絶対的な烈への忠誠心は、いつか彼自身を壊してしまいかねないと理解していたのに。

そして四年前、正宗は烈に何も告げないまま、あっさり身を引いた。触れることのできない距離に身を置くことで、いつ暴発するかわからない自分の強い感情から、烈を守ろうとしたのかも知れない。

「悪いな。俺は……奥手なのか鈍いのか、いいなと思う女はいても、いまだに恋人の一人もない。男同士でどうか、よくわからねーけど、おまえの気持ちは、嫌じゃねーよ。むしろ、うれしいと思ってる。ただ……兄弟みたいに育ったおまえに、そういう意味で応えられるかどうか……約束はしてやれねー」

正宗の気持ちを知って、それに応えたいと思うだけなら、それはただの同情だろう。烈は、正宗にどう触れればいいのか、わからなくなっていた。

近づけば近づくほど、正宗を苦しめることになる。どうすればいいか迷っているうちに、正宗のほうから離れていってしまい、烈はなんの答えも出せないまま、四年が経ち、こうして再会した。

正宗の顔を見れば、あの時から、どちらも何ひとつ変わっていないことは明白だった。

「わかっています。……この気持ちは、消してしまうつもりでした。四年、あなたと離れれば、忘れられると思っていた。けれど……すみません」

闇の中で聞こえる正宗の言葉は、彼の苦しみも恨みも押し隠し、穏やかなままだった。

たった一人で『藤和会』を守る決心をした烈のために、アメリカから帰ってきたのに、また勝手に感情を押し殺して同じことを繰り返すつもりなのかと、無性にムカついてくる。

「バカ野郎っ、謝るな！ 嫌じゃねーって言ってるだろ……。俺は、そんな理由で、おまえを手放すつもりはねーからな。だいたい、一人で勝手に決めて、孝史たちと留学しちまったこと

だって、まだ許してるわけじゃねーんだ。俺に本気で惚れてるなら、なおさら側にいろ」

烈が奥手で子供すぎたのだとしても、そういう相手にわざわざ惚れた正宗だって、責任はある。烈の気持ちを確かめるぐらいのことはするべきだったはずだ。一方的に見切りをつけるなと、勝手ばかりする男を責めた。

怒りに任せ、自分の側で苦しみと言い放つような真似をした烈に、正宗はせつなそうに端整なおもてを歪めた。

「残酷ですね……」

「おまえだって、覚悟を決めて、ここに戻ってきたんだろ……？」

「ええ……」

正宗が『藤和会』の若頭になる以上、もう烈から逃げることさえできない。どれだけの恋情で身を焦がしても、側にいてくれるのだらうと微笑む烈に、正宗は真顔でうなずいた。

「で……どうしたいんだ？」

「どう、とは……？」

「俺の寝顔を見ればいいのか？ それとも、告白したかったのか？ それとも……キスしたいとか、セックスしたいとか……えーと、男同士って、どうやってやるんだ？」

告白もキスも、さっきのどさくさでしてしまったけれど、この深夜に、自分の寝室へ何をしにきたんだと、烈は改めて質問した。

そして、男同士のセックスは、具体的に何をするんだと、つい素朴な疑問まで口にした。とたんに、枕元から嘖き出したみたいな笑い声が聞こえて、ムツとした目つきを闇に凝らす。

正宗にしてみれば、烈の無邪気さは、子供じみているし、菌痒はがゆささえ感じているかもしれない。けれど、成長してほしいなら、少しはおまえも協力しろよと、布団の下の薄い肩を竦めた。「笑うなよ。ほんとに知らねーんだ……」

「もちろん、あなたが欲しいとは思いますが、無理強じいする気はありませんよ……」

「そうだとしても、こんなふうにな夜中におまえを突っ立たせておくのは、俺としてもやるせねーんだよっ!」

正宗をどんなに苦しめることになるかと、手放したくない。けれど、けっして彼を苦しめたわけではないのだと、烈はいくらか気弱に目を伏せた。

「そうですね。失礼しました……」

案の定、烈の目障りにならないようにと静かに立ち上がり、出ていこうとする正宗を、反射的に手をつかんで引き留める。

「そうじゃねーって。おまえが側にいてくれるのは、うれしいんだ……。だから……」

「……俺に、抱かれてくださると?」

同情で応えてくれるのかと、布団越しに抱き寄せてくる正宗に、皮肉めいた口調で訊かれ、烈は素直な動揺を隠せなかった。

「ちよつと待てつ。俺にだって、心の準備つてものが……」

からかっただけだったらしく、正宗はクスクス笑うばかりで、布団の下の体には直接触れようとはしなかった。

「人の好意を笑いやがって……」

「すみません。しかし、本当に若が無理をなさる必要はありませんよ」

正宗がどれほど我慢強いかは、ずっと彼を見てきた烈にだってわかつている。烈が許しを与えなければ、一生、そういう意味では指一本さえ手出しできないだろう。

「でも……側にいたら、やっぱり堪んねーんだろ？」

「それは……男ですからね、一応。けれど、理性ぐらいはありますよ」

なんでもないことのように答える正宗は、こうして烈を抱いていてさえ、その衝動に本気で耐えるつもりなのだろう。

四年間、アメリカに逃げても、烈を忘れられなかったのだと謝った。

正宗をそこまで追いつめてしまったのは、気づいていながら彼を放っておいた自分だ。このままいっしょにいても、また同じことを繰り返すのだろう。

「……なあ、正宗」

「はい……」

「試していいか？」

同情だと責められるなら、それでもよかった。

烈には、正宗が必要で、もう二度と離れるつもりはなかった。彼とセックスしたところで、誰かに責められるようなこととも思えない。

「若……」

「俺は……おまえの気持ちに気づいてた。もう、ずっと前から……」

四年前、正宗も薄々、それを感じ取っていたはずだ。だからこそ、烈への気持ちを隠し通そうと焦^{あせ}ったのだろう。

祖父に対しても、その孫である烈にも、誠実な男だったから、胸の内に劣情を秘めていることすら、許せなかったのかもしれない。

「おまえも……だから、留学を決めたんだろ？　俺から離れるために……」

何か言いたそうな正宗の吐息が、耳元を掠めた。でも、彼は結局、言い訳しなかった。多分、できなかった。

「おまえは、俺のためにそうしたんだろうけど、俺は……傷ついたんだ。おまえを永遠に失うんじゃないかと怖かった。だから……もう二度と、あんな後悔はしたくねーんだ」

「若……、俺は、若の側から離れたりしません。離れられるわけがない。あなたから逃げて、アメリカに行つて、後悔したのは俺のほうです……」

肝心な心の内までは、きつとどちらも理解できていないのだろう。四年間の誤解を埋めてい

くのは、きっとこれからだ。

「苦しめて、すみませんでした。あなたを苦しめるのが、何よりつらい……」

烈を泣かすぐらいなら、どんな苦痛にも耐えられた。強がるのを諦め、やっと本音を洩らし始めた正宗の首を引き寄せて、烈は勢いだけで唇を重ねた。

「若っ……?」

「なんだよ、嫌なのか?」

「そうじゃありませんが……」

いくら正宗が相手でも、体を委ねるのは怖かったのではないかと、改めて確認するように見つめられて、烈は持てあましてきた迷いを押し殺した。

正宗のやさしさに、ずっと甘えてきた。けれど、子供のように甘えたままでは、この先へ進めない。

「下手くそなのは、仕方ねーからな。初めてだし……」

誘惑するということには色気の欠片もないやり方で、しゃにむに引き寄せようとする烈を、正宗はなだめるように抱きしめた。そして、まだ聞き分けのない子供をあやしているかのように、ひっそりと溜め息をつく。

「仕方ありませんね。……力を抜いてください」

どんな形であれ、正宗を少しでも満たせるのなら、それでいいと、烈は素直に強張り^{こわば}を解い